

ンジダ症では AIDS も一応考慮する必要がある。

食道癌内視鏡的粘膜切除術の検討

(沖縄ハートライフ病院 外科)

奥島憲彦・竹島義隆・蔵下 要・
仲地広美智・天願 勇

当院で1994年4月から1998年1月までの3年10カ月に16例の食道癌にEMRを行なった。m₁ 10例、m₂ 4例でsm₁が2例あった。共にsm₂程度と予測したが重篤な合併症のため手術不能で相対的適応でEMRを行なった。観察期間が最長3年9カ月と短い、14例は再発はなかった。2例で癌の遺残があったが、共に再度EMRを行ない再発はなかった。合併症として3例で狭窄となり拡張術が必要であった。以後は全周に近い切除の際はEMR後1週目よりバルーン拡張術を行なうようになって狭窄はない。穿孔が3例あり、1例は分割切除の最後にpin holeの穴があき皮下気腫が生じ、他の1例はオーバーチューブで頸部穿孔し、他の1例は狭窄部をブジー後穿孔した。共に内科的治療で治癒した。

BRM局注併用の術前照射、進行食道癌の3例

(癌研究会付属病院 放射線科)

中川昌之

数年前より食道癌の根治照射に際して5Fu, CDDPの化学療法に加えOK-432の局注を併用してきた。照射単独例に比べ良好な一次効果が得られている。そこで、このBRM併用化学放射線治療が術前照射として有効か否かを検討すべく、本法による術前照射症例3例の切除標本について検討を行った。

結果、食道の主病巣においては3例中2例にわずかながら癌の遺残が認められていたが、郭清された所属リンパ節には癌転移の所見は見られず、照射野外の数個のリンパ節においても異物肉芽の存在が認められた。

通常、局注は主病巣に対する効果を意図している。一方、イカ墨やRIの局注により転移がリンパ流によって生じることがいわれており、今回このリンパ節転移の機序を考慮した局注の併用療法は、転移リンパ節の治療に有用であったと考えている。

切除不能食道癌に対するメタリックステントの効果

(都立駒込病院 外科)

末永洋右・葉梨智子・吉田 操

現在、切除不能な進行食道癌による食道狭窄に対しては姑息的治療である食道ステント挿入術が日常的に行われている。しかし、食道が気管および気管支に隣

接していることから、しばしば気道の狭窄や食道食道瘻という問題が同時または異時的に生じてくる。今回我々は食道と気道の双方に狭窄を生じた患者に対して、いわゆるダブルステントを挿入した症例を経験したので報告する。

消化性潰瘍に対する胃迷走神経切離術のアメリカでの現況とその評価

(広田病院)

広田和俊

十二指腸潰瘍に対する迷走神経切離術は前世紀からの基礎的実験的研究を踏まえて今世紀初頭にも臨床報告されたが、本格的に普及したのは1943年以降である。数多くの基礎実験に基づいた理論に立脚して臨床応用され確たる成果をあげてきた。私は1980年と1990年に迷切術の米国の状況について調査報告したが、再調査して現況を把握した。出血時の手術では92%の頻度で迷切術かその合併術式が用いられており、狭窄症例にも79%の高頻度である。私は400例の自験例の満足できる結果から、現在も幹迷切+幽門成形・前壁固定術を出血・穿孔・狭窄の手術例に用いている。この術式の安全性と根治性から推奨できる術式である。

8年間経過観察された reactive lymphoreticular hyperplasia の1例

(東女医大 成人医学センター)

柳沢明子・橋本 洋・前田 淳・
重本六男・山下克子・横山 泉

症例は72歳男性で、定期検診の内視鏡検査でRLHと診断され、8年間にわたり経過観察された。胃体部小彎の褪色した陥凹性病変は、経過中、びらんの出現もみられたが、'95年頃より血管透見が認められ萎縮性胃炎像を呈し、軽快傾向を示した。経過を通して生検組織像では、慢性炎症細胞浸潤像とともに、MALTリンパ腫を疑う組織像を認めたが、免疫組織染色では腫瘍性増殖が認められなかった。近年MALTリンパ腫の急性増悪例が報告されるようになり、本例のごとき内視鏡像とリンパ球浸潤を呈する症例に際しては、内視鏡所見と病理組織像から総合的に判断し、十分な経過観察が大切であると考えた。

腹腔内破裂をきたした腸間膜原発 primitive neuroectodermal tumor (PNET) の1例

(谷津保健病院 外科)

松波克弘・河 喜鉄・森山 宣・
宮崎正二郎・藤田 徹・平山芳文・
糟谷 忍・御子柴幸男

[症例]56歳男性。1997年4月2日、下血、発熱、排